論文

夏目漱石の『心』に見られる知識人の精神苦境について

A study of the mental predicament of intellectuals in Natsume Soseki's "Heart"

康传金*・唐文茏**
KANG Chuanjin, TANG Wenlong

This paper explores mental predicament of "Teacher" and "K," who are the main characters of the novel “Heart” by Natsume Soseki. In his novels, Soseki often describes the "intellectuals" of the Meiji period, who had experienced unique mental predicament due to conflicts between East and West values. In this paper, we first refer to what is mental predicament in this argument and then examine mental disorders that are described in the novel “Heart,” including solitude, suspicion, contradiction and secretion. These analyses explain some of main factors of the mental predicament of intellectuals at that time, such as family system, individualism and liberalism. To sum, this paper argues how "Teacher" and "K" as Meiji intellectuals are fell into mental predicament within the shifting values of the Meiji period.

キーワード：『こころ』(“Heart”)、 明治時代(the Meiji period)、 知識人(intellectual person) 、精神苦境(mental distress)

1.　はじめに

夏目漱石は現代日本文学の先駆者の一人として、その思想の先進性と精神の啓蒙性により、明治時代の流れを作り出した「時代の批評家」とも言えるだろう。漱石の生涯を振り返ると、人生と真摯に向き合い、社会の事象に関心を持ち、当時の人々やその生活、行動様式を数多くの作品の中で描いてきた。特に、明治の知識人たちが精神世界と社会の実情との間で葛藤する描写は非常に優れている。例えば、漱石の後期三部作の一つで彼の代表作でもある『こころ』は、家制度、個人主義、友情と猜疑心の間でゆれる二人の人物を見事に描き切っている。この論文は、文芸評論として『こころ』に登場する二人の人物「先生」と「K」の葛藤をその時代背景を通して考察し、『こころ』への理解を一層深めるための一助としたい。

当然ながら、『こころ』に関する研究はこれまでに国内外で多く行われてきている。例えば、漱石の門人で同じ明治を生きた小宮豊隆は、明治の知識人の心底に存在する闇、苦悩、罪悪感、エゴイズムなどを『こころ』から読み取っている。この点に関しては本稿も同様だが、小宮ら初期の漱石研究の考察対象は主に「先生」で、その他の人物に焦点が当てられることは少なかった。その後、『こころ』に関する研究は「先生」から他の人物へと議論が拡大されていく。例えば、作品論として批判を受けることもある越智治雄の『漱石私論』(1971) だが、「K」を「先生」と同じように重視しているところは注目に値する。本稿は当時の時代背景や漱石の経歴をその考察に含むことから作品論とは一線を画すが、「K」を「先生」と同じように重視し分析する点では越智に倣っている。また、中国でも漱石、そして『こころ』に関する研究は盛んだが、テキスト解析が中心で人物の精神性、個人主義、自殺などを単純にテキストから読み取ろうとしているものが多い。例えば、趙小娜の「論夏目漱石後期三部曲中人物的倫理困境（夏目漱石後期三部作における人物の倫理的苦境について)」(2019) は、漱石後期三部作に描かれた中心人物の比較を通してその精神苦境を論じている。しかし、この論文は比較研究、テキスト解析を主な手法としており、当時の時代背景や漱石の個人主義などについての考察が十分とは言えない。本稿では比較研究の手法は敢えて取らず、『こころ』に登場する「先生」と「K」に焦点を絞り、明治の知識人の精神苦境を明らかにしていく。以下にも述べるが、「先生」と「K」は漱石の分身のように描かれており、本稿ではこの二人に焦点をあてることで漱石の思想や苦悩をより詳細に考察する。このように、「先生」と「K」に焦点をしぼり、そこから「時代の批評家」としての漱石の視点を探り、明治の「知識人」の精神苦境を読み取ろうとする研究はまだ

*大阪観光大学・恵州学院外国語学院/日本語言語・日本文学　** 恵州学院外国語学院/日本語言語・日本文学

少ない。

変革の時代にあった明治社会を振り返ると、当時の知識人はその理想と現実の乖離に直面せざるを得なく、そこでは東西思想の衝突は避けられないものだったのだろう。新しい価値観と向き合わざるを得ない社会では、矛盾と衝突が繰り返され、その結果として「精神苦境」が生みだされる場合が多い。漱石の『こころ』は、このような明治の「精神苦境」が生みだされた過程を「先生」と「K」という人物を通して如実に描き出している。

本稿では、まず精神苦境について概観したあと、『こころ』における精神苦境の具体的な表現を、孤独、猜疑心、矛盾、隠匿などを通して分析する。その後、明治の時代背景や当時の知識人の精神性などを、家制度と自由、個人主義、また漱石の個人履歴などを通して読み取り、矛盾と衝突が重なり合った時代が作り出した「精神苦境」を論ずる。このような議論を通して、本稿は『こころ』という作品の新たな解釈やその理解を一層深めるための可能性を探ってゆきたい。今を生きる我々も、当然のことながら多くの精神苦境を抱えている。本稿は単なる『こころ』の考察のみでなく、新しい価値観と直面せざるを得ない時に経験する精神苦境と我々はどう向き合っていけばよいのか、という課題への一助ともしたい。

2.　精神苦境について

精神、そして精神苦境は、哲学のテーマとして東西問わず古くからある。例えば、仏教の教義は苦の輪廻からの解脱を目指すことにあり、細かい点は宗派や学派ごとに異なるが、仏教哲学の根本はまさに生の中で永遠に続く苦の輪廻からの解放にあると言えよう。仏教のような伝統的東洋哲学、思想では、心と体は一体と考える傾向があり、精神的世界と物質世界はそれぞれ独立している、とは考えない場合が多い。一方、西洋哲学では、例えばデカルトの実体二元論など物質世界と精神世界が互いに独立していると考える場合もある。ただし、この場合でも相互作用二元論のように、苦悩を含む心の状態は物理的な状態と相互作用すると考えられている（デカルト,1641;山田弘明訳,2006）。何が言いたいのかというと、精神苦境をテーマとして本稿の議論を進めていく上で、精神を取り囲む物質世界、つまり本稿においては明治時代における伝統的な家制度や西洋文化の導入といった外部環境の考察が欠かせないということである。

人間における「精神」は内在的な存在として、人の存在意義にも深く関わってくる。『こころ』の登場人物「K」が言うように（下記参照）、精神的な満足感や向上心を求めない人は魂がなく生ける屍のように虚しく世の中を彷徨うだけだろう。だからこそ、人は人としてその精神を満たし、精神的な苦境があればそれを克服しようと努める。それは、人間の本質として最終的に人間性の発展を促す可能性がある。しかし、この苦境を克服できない場合は、『こころ』に登場する「先生」や「K」のように悲劇的な結末を迎えることもある。

苦境は、人間が生活のなかでいつでも出会う可能性のあるものだ。また、苦境は外在的な環境に多分に左右され、人をある特殊な抜け出せない状態に陥れることもある（徐,1988:276）。このような状態にある人間は、絶えず思考を凝らし、絶えずそれを突き破ろうとしても、まだ自分の望む結果を得ることができずに、それは精神的な危機をもたらすだろう。本稿で論ずる明治の知識人も、意図せずに与えられた役割や身分、社会的地位などの外在的な環境との関わりの中で、一個人の運命、存在意義なども脅かす苦境に陥ってしまう。以下に論じるように、『こころ』に登場する二人の人物「先生」と「K」の精神苦境は、日本の伝統的な道徳や慣習と西洋思想の影響を受けた個人主義の間で起こり、突破の方向も見つからず彼らは困難な立場に陥り、それは結果として一連の悲劇的な結末を彼らにもたらしてしまう。

3.　『こころ』における知識人の精神苦境の具体的な表現の分析

日本の明治時代における文脈の下での「知識人」とは、一般的に大学教育を受けそこで学んだ知識を持って社会に奉仕する者のことを指す。それは肉体労働者とは明確に区別され、それとは対立した地位にある頭脳労働者とも言える（于,2009:2）。知識人は、肉体労働を主とした生産活動などには直接的に参加することは少ないが、漱石がそうだったように、社会の転換期に新たな流れを作り出すような重要な役割を果たすことが多い。つまり、

知識人は社会の発展の中でかけがえのない存在といえよう。

『こころ』に登場する「先生」と「K」は、明治 30 年代前半に思春期を過ごした青年知識人の代表として描かれている。この二人は、伝統的社会制度、西洋思想、個人主義などの間に生まれた矛盾に直面し、自分の立ち位置に迷う当時の知識人のイメージを鮮明に映し出す。

「先生」は、『こころ』の主人公として描かれている。彼は、青年期に後見人である叔父に裏切られ、人間など頼りにならないと思うようになる。だからこそ、作中で奥さんやお嬢さんの善意に触れ、お嬢さんを愛するようになっても、同時に彼女らに対しての「疑い」も捨て去れない。「K」は「先生」の親友として描かれていて、二人は同じようにお嬢さんを好きになる。友情と恋の衝突、そして最終的な「先生」の裏切りは、「K」を死に向かわせる。「K」が死んだ結果、「先生」は望み通りお嬢さんと結ばれる。しかし、それは「先生」に自責の念と漠然とした不安をもたらし、お嬢さんとの結婚生活も懐疑的なものとなる。そして、「先生」も「K」の後を追うように悲劇的な結末を迎える。

(1)　孤独-親族の裏切り

ここでは、「先生」が経験したとされる「親族の裏切り」、そしてその後の「孤独」について考察する。「先生」は二十歳にならないうちに両親をなくし、生前の母が頼んでいた通りに「先生」の叔父が後見人として「先生」の面倒を見るようになる。この時点で、この叔父だけが「先生」の唯一の頼りになる親族であった。「先生」の後見人となった叔父は、母の頼みをきちんと履行し「先生」を東京で勉強させた。また、「先生」は両親の財産の唯一の相続人として巨額の富を相続していたため、叔父は「先生」を自分の娘と結婚させ「先生」の家を守ろうとした。叔父の再三の結婚の催促に対して「先生」は断り続けていたが、早く結婚すれば両親が作り上げた家を継ぐことができるという考えも「先生」を揺さぶっていた。いずれ田舎に帰って家を継ぐためには、まず嫁をもらうのが合理的だ。しかし、東京に来たばかりの「先生」は、自由な生活の中で外の世界に好奇心を持ち、それらを捨てて田舎で家を継ぐことなどできなかった。ここで既に、「先生」は「伝統的な日本人としての孝行心」と「西洋的な心の自由の追求」の間で揺らぎ、それは大いなる矛盾となって後に「先生」を苦しめることになる。

叔父は何度も「先生」に自分の娘との結婚を催促し、失敗し、最終的には「先生」を裏切りその財産を奪う。この叔父の裏切りによって、「先生」は他人に対して極度な不信感を持つようになる。作品中、「先生」は以下のように語っている。

> 造り付けの悪人が世の中にいるものではない。多くの善人がいざという場合に突然悪人になるのだから油断してはいけない（夏目,1951:175-6)。
> 金さ君。金を見ると、どんな君子でもすぐ悪人になるのさ（夏目,1951:85)。

叔父の裏切りの結果、「先生」は家や財産を失い、故郷からも離れ、人を信じることができない孤独な人となった。この「先生」の叔父は、伝統的な日本社会の一員として、古いしきたりや習慣を遵守する人物とも言える。西洋的な個人の自由や利益などは、明治の「家制度」（下記参照）の中では意味をなさない。だからこそ「先生」を裏切り、その人間性さえも軽んじ捨てたのだ。しかし、それは「先生」にとって唯一の頼りとする親族と信じた人との破綻であった。そのような不安定な精神状況に置かれた「先生」は、「多くの善人がいざという場合に突然悪人になる」といったステレオタイプを持つようになり、それは彼の社会全体に対する懐疑心を生み出した。自分と話す人、身の回りにいる人は誰でも疑わずにはいられなくなった「先生」は、孤独者といえるだろう。思想が開化し文明が自由に向かっていた新しい世界で、有志を持った「先生」は明治の大潮の中で自分の未来を広げたいと思っていた。だが、そこには古い日本の社会制度を守る叔父が立ちはだかり、彼の裏切り、搾取によって「先生」は心を失う。これが「先生」の中で最初に生まれた、「孤独」という精神苦境である。

(2)　疑い-恋人への警戒心

「先生と遺書」の部分では、「先生」の視点でお嬢さん「静」と知り合い、恋愛してから結婚するまでの過程が書いてある。それは「先生」が望んでいたことだが、その結果親友「K」が自殺し、それは新たな精神苦境となり「先生」を悩ませることとなる。

前述したように、「先生」は叔父に騙され人を信用できなくなった。人を信用できないということは、それだけで多くの悩みを抱えることになるだろう。彼は二度と騙されまいと、周囲の人を絶えず警戒するようになる。故郷を離れて東京へ進学した時も、下宿先で同じ屋根の下に住んでいる奥さんやお嬢さんにさえ警戒心を抱いていた。しかし、彼自身がお嬢さんのことを好きだと気づいた時、そこに絶えまない猜疑心と実直な恋心、恐怖と憧憬を同時に持つような複雑な感情が生まれる。「先生」のお嬢さんに対する愛は止めようがなく、しかし奥さんとお嬢さんは自分の財産のために関係したいのではないかという憶測が邪魔をする。恋の面ではお嬢さんを固く信じる「先生」だが、彼の心の中の警戒心は消えることはなかった（叶,2003:47）。

> 私はまた警戒を加えました。けれども娘に対して前いったくらいの強い愛をもっている私が、その母に対していくら警戒を加えたって何になるでしょう。（中略）二人が私の背後で打ち合せをした上、万事をやっているのだろうと思うと、私は急に苦しくって堪らなくなるのです。不愉快なのではありません。絶体絶命のような行き詰まった心持になるのです。それでいて私は、一方にお嬢さんを固く信じて疑わなかったのです。だから私は信念と迷いの途中に立って、少しも動く事ができなくなってしまいました。私にはどっちも想像であり、またどっちも真実であったのです（夏目,1951:194）。

その後、親友「K」がこの恋愛事情に介入してくると、事態はさらに複雑になる。「先生」は金銭的な疑いだけでなく、「K」とお嬢さんの関係にも疑いを持ち始める。「先生」のお嬢さんへの疑いは、お嬢さんの笑い声が「K」の部屋から聞こえてきた時から深まっていく。それだけで「先生」は平静を保つことができなくなり、お嬢さんとも普通に接することができなくなった。お嬢さんは頻繁に「K」の部屋に出入りするようになり、「先生」の不信感、そして猜疑心は一層募っていく。そして、ついには道でばったり「K」がお嬢さんを連れているところに出くわす。「K」はお嬢さんと偶然出会っただけだというが、「先生」の疑念は晴れない。

> もしかするとお嬢さんが K の方に意があるのではなかろうかという疑念が絶えず私を制するようになったのです。（中略）お嬢さんに、直接この私というものを打ち明ける機会も、長くいっしょにいるうちには時々出て来たのですが、私はわざとそれを避けました。日本の習慣として、そういう事は許されていないのだという自覚が、その頃の私には強くありました。しかし決してそればかりが私を束縛したとはいえません。日本人、ことに日本の若い女は、そんな場合に、相手に気兼ねなく自分の思った通りを遠慮せずに口にするだけの勇気に乏しいものと私は見込んでいたのです。（夏目，1951:243）

愛する人を疑うのは辛いことだ。「先生」はお嬢さんを疑いたくない。しかし、お嬢さんの「K」への態度は疑わざるを得ない。ここでも「先生」は自由意志、自由恋愛と、「そうゆうことは許されていない」という「日本の習慣」の間で葛藤することになる。このような葛藤は疑いを自分にまでも向かわせ、それは精神苦痛として心に蓄積していった。その後、「先生」は親友「K」のお嬢さんに対する愛情を知りながらも、彼を裏切りお嬢さんと結ばれる。お嬢さんとの結婚は勝利であり喜びだが、同時に「K」に申し訳ないと感じ、心の中で喜びと自責の相反する心理が「先生」を苦しめていく。

(3)　矛盾-求道と情欲の間で

ここでは一旦「先生」から離れ、「K」の内面に描かれた矛盾からくる精神苦境を分析する。「K」の生みの親は真宗の僧侶で、「けれども義理堅い点において、むしろ武士に似たところがありはしないかと疑われます」（夏

目,1951:210）と紹介されている。「K」は幼い頃から父親に武士道的な自分を律する思想を刷り込まれ、苦行僧の修行なども行い、学問だけでなく精神を育成することを良しとしてきた。その後、次男でもあった「K」はある医者のところへ養子に出される。彼の養父は彼に医学を学ばせ後を継がせようとしたが、「K」は養父を騙すような形で自分の好きな道を歩んでゆく。その結果、養家の感情を害するだけでなく、実家の怒りも買うようになる。結局、「K」の実家は養家が出した学資を弁済することとなり、「K」は実家に復籍する。その結果、家族と疎遠になった「K」は、「先生」と同じように孤独を感じることになる。

自分と同じような境遇の親友「K」を見て、「先生」は奥さんとお嬢さんになるべく「K」と話をするよう頼んだ。そうすることで「先生」は自分同様、「K」の心も安らぐと思ったのだ。すると、「K」は徐々にお嬢さんに惹かれ、恋心を抱いてしまう。「先生」は「K」に対して苛立ちを覚え、もっと学業に専心するべきだと「K」を諭すようになる。「K」自身も、普段から精進や禁欲を心がけ、恋そのものが「道」の妨げになると考えていた。このように、自身のあるべき理想と恋心が衝突し、「K」の心に矛盾が生じる。「K」の世界では、お嬢さんを慕うのは彼がすべてを犠牲にして理想を追求する初心に背き、彼の心に葛藤を生んだ。

この時の「K」は困惑し、一方では人生の信仰を諦めきれず、一方では世俗の情に執着していた。「K」はこのようなうろうろとした矛盾の心を、唯一信頼している「先生」に訴え意見を求める。「先生」は以前「K」に言われた言葉―「精神的に向上心のないものは馬鹿だ」（夏目,1951:260）をそのまま「K」に返す。「先生」が二度同じ言葉を繰り返すと、正直で善良な「K」は「先生」に返す言葉もなく、すぐに弱い声で「馬鹿だ。僕は馬鹿だ」（夏目,1951:262）とつぶやく。求道者であった「K」は、どんな困難に直面しても自分の力でその信条を堅持できると考えていた。しかし、「先生」の言葉を聞き、「K」は自分がずっと堅持してきたはずの信条に背いていることに気づく。

> 「もうその話は止めよう」と彼がいいました。彼の眼にも彼の言葉にも変に悲痛なところがありました。私はちょっと挨拶ができなかったのです。するとKは、「止めてくれ」と今度は頼むようにいい直しました。私はその時彼に向って残酷な答を与えたのです。狼が隙を見て羊の咽喉笛へ食くらい付くように。「止めてくれって、僕がいい出した事じゃない、もともと君の方から持ち出した話じゃないか。しかし君が止めたければ、止めてもいいが、ただ口の先で止めたって仕方があるまい。君の心でそれを止めるだけの覚悟がなければ。一体君は君の平生の主張をどうするつもりなのか」。私がこういった時、背の高い彼は自然と私の前に萎縮して小さくなるような感じがしました（夏目,1951:263）。

「K」は求道と情欲の間で、自分の信仰が恋に耐えられないことを恥じ、自身の意志でその信仰と理想を裏切ったことにより、深い自責の念と精神苦痛を覚えた。そして、家族と疎遠になった後、唯一人信頼していた「先生」にも裏切られる。彼は失望し、現実を避け、悲観的に世を嫌い、自絶的な方法で精神的解放を求めることになる。

(4)　隠匿-惨憺たる婚姻

「K」が自殺したことにより、「先生」の幸せなはずだった婚姻にも暗い影が落ち、それは「先生」のもう一つの精神苦境となる。「私は世の中で女というものをたった一人しか知らない。妻以外の女はほとんど女として私に訴えないのです。妻の方でも、私を天下にただ一人しかない男と思ってくれています。そういう意味からいって、私たちは最も幸福に生れた人間の一対であるべきはずです」（夏目,1951:33）。しかし、実際の結果はそうではなく、彼らの婚姻は惨憺たる結果をもたらした。なぜなら、「先生」とお嬢さんの結婚は、「K」の自殺をその対価としていたからだ。「私の亡友に対するこうした感じはいつまでも続きました。実は私も初めからそれを恐れていたのです」（夏目,1951:288）。「先生」は結婚した後の生活でも「K」のことがずっと気になり、良心の呵責に苛まれていた。

このような苦痛を解くために、「先生」は読書に没頭したり、酒を飲んだりと、いろいろと試みた。また、罪を償うように毎月「K」の墓参りもした。しかし、「先生」は妻となったお嬢さんの顔を見るたびに、K に脅かされるような気持ちを覚えるようになる。すると、今度は妻が「先生」に対して、自分を嫌っている、何か隠し事をしている、と猜疑心を持つようになる。「先生」はその度に苦しめられた。妻に自分の心を素直に伝えたいという気持ちはあったが、「先生」がその内心を妻に打ち明けることはなかった。押野（1998:41-42）はこう述べている。「親友の裏切りと失意が主たる原因で『K』が自殺したと聞かされても、『静』（妻）は『先生』と結婚したことを後悔するだろうか。あるいは、『先生』のような罪意識を抱くだろうか。(中略)彼らにとって『静』は、理解不可能な他者なのであった」。

「先生」は自分を飾る気は全くなかったが、妻の心に暗い影を落とすことを恐れていた。彼女の記憶を純白なままに守りたかったのだ。このような隠匿の中では、幸せなはずの結婚生活も孤独なものとなる。

> しかし腹の底では、世の中で自分が最も信愛しているたった一人の人間すら、自分を理解していないのかと思うと、悲しかったのです。理解させる手段があるのに、理解させる勇気が出せないのだと思うとますます悲しかったのです。私は寂寞でした。どこからも切り離されて世の中に一人住んでいるような気のした事もよくありました（夏目,1951:292）。

「先生」は「静」と望んでいた結婚をしたにもかかわらず、良心の呵責を背負い幸せには暮らせなくなった。「私たちは最も幸福に生れた人間の一対であるべきはずです」（夏目,1951:33）。この文には、「先生」の心のため息が見える。「先生」と「静」は互いに愛し合っているが、そこには深い隔たりも存在し、「先生」は心を開くことができない。妻も「先生」から真相を知ることがないまま、最後は未亡人になってしまう。隠匿のため、夫婦の心が通じない。見えない隔たりがあるため、互いに幸福を少しも感じられない。だから彼らの愛は悲惨である。

4.　『こころ』における知識人の精神苦境が発生する原因

上記のように、『こころ』における知識人は孤独、疑い、矛盾、隠匿などの精神苦境を経験した。以下では、明治時代の家制度、西洋的自由とその倫理観、個人主義の価値観、著者の個人経歴などを通して、『こころ』の知識人がなぜ精神苦境にとらわれたのか、その時代背景から考察する。

(1)　家制度と自由の衝突

「先生」と「K」は、明治時代の「家制度」を基盤とした価値観と、西洋の「自由」を基盤とした新しい倫理観の間で困惑している。日本の「家制度」は 1898 年（明治 31 年）に規定された日本の家族制度で、それは江戸時代以前から武家や公家の家庭で支配的だった家族体系を元にしている。これは民法でも定められていたように、広く日本社会で影響を持っていた制度だ。その基本的な特徴は、家の統率者として戸主がおり、戸主は家族に対する扶養義務を負っていた。この戸主の地位は男子で一番年長の「長男」が家督相続人として受け継ぐことが原則だった。「家制度」の元で家族は集団意識を強く持ち、個人は集団に従い集団のために奉仕すべきだ、という考えが強かった。父と子だけでなく男女の優劣も等級的に厳しく格付けされ、各々自分の立場に応じてその意識と行動を家族としての集団的利益のために捧げることも多かった（姜,2008:97）。「長男相続制」と「養子制度」はいずれも「家制度」の継続性を強固にするために有用で、この制度下では実子であれ養子であれ、嫡子は「家」の後継者として家族の扶養義務、家の隆盛に対して責任を負い、自己の自由意志などは抑えなければならない場合も多かった。

『こころ』に登場する「先生」、そして「K」はどちらも嫡子として「家」に対して責任を負っていたのだが、結局それを自分の自由のために放棄している。「先生」の場合は、両親が亡くなると実子の長男としてすぐに「家」の維持責任に直面する。当時の「家制度」的社会通念から見ると、結婚と家庭は個人の恋愛感情を超えたものだ。だからこそ、「先生」の叔父は「家制度」の観念に従い自分の娘を「先生」の妻にしようとした。当時の倫理的文

脈として、この叔父のやり方は妥当だ。しかし、東京で勉学し新しい西洋の人文思想の影響を受けた「先生」は、自由な結婚を崇拝し手配された結婚を受け入れることなどできなかった。叔父の家制度的「好意」は、「先生」にとっては彼の自由を奪う「悪意」なのだ。明治の知識人として「家制度」も理解し受け入れようともする「先生」だが、西洋的な自由や恋愛は捨てきれず、そこに衝突と矛盾が生じた。それは家制度、家父長制の伝統観念と自由恋愛的観念の衝突と矛盾だ（侯,2017:55）。結局、「先生」は相続人として担うべき家存続の責任と義務を捨て、それゆえに叔父に財産を奪われ、人をも信じることができなくなる三重苦をその心に負うことになる。「先生」の選択は間違いなく、明治社会の「家制度」に深刻に背く行為だが、当時の知識人の多くがこのような精神苦痛を経験したと考えられる。

それは、『こころ』に登場するもう一人の明治の知識人、「K」の精神苦痛からも読み取れる。「K」は「先生」とは幼馴染で、同じように上京し大学で勉強をしていた。「K」は実家では次男であったが、養子として医者の家へ出されており、大学では医学を学び将来は医者の家を継ぐものとされ、上京して勉学するための資金も当然養家から出されていた。しかし、「K」は自由をもとめ医学を学ばず、最後には養家を騙すような形で実家に戻る。これは「家制度」の中での養子、嫡子に定められた義務への深刻な背徳である。「K」自身が言ったとされる「精神的に向上心のないものは馬鹿だ」という言葉から、「K」は一見、実の父から教えられた日本の伝統的な武士道倫理や観念に支配されているかのようにも思われる。しかし、それは精神の向上をどこに持っていくかによって見方が変わってくる。養家から送られた金で自分の好きな道を歩いていた「K」は、明治の知識人として新しい西洋的自由の思想に影響を受けていたのだろう。何度も養家から帰るように催促されても帰らず、経済的困窮に陥っても頑なに自己を堅持しその精神を守ろうとする「K」は、家制度の既存概念に自由を持って挑戦した明治の知識人そのものだ。しかし、社会的・家庭的倫理に背いた「K」は、養家だけでなく実家からも疎遠となり、生活していくことすら困難になる。この孤独、心の寂しさは、精神苦境となり「K」を苦しめた。

明治時代の家制度から見ると、子供は「家」の中で非常に重要な存在だ。それは家の伝承のためだけでなく、その家に所属する家族の生活、そして命をつなげていくための大前提でもあるからだ。「先生」は自分には子供が永遠にできないと信じ、それは天罰の結果だと思っていた。当時、子供がいない家庭は、家を存続することができない欠けた存在として、それだけで円満とは言えなかっただろう。このような日本の伝統的な観念に縛られながらも、『こころ』に登場する知識人は、西洋的な個人の自由を追求する思想を合わせ持っている。「家制度」対「個人の自由」という相反する思想が衝突する中で、「先生」と「K」は戸惑いながら家族や恋人、友人との関係を保たなければならなかった。「先生」は恋の自由を追求し、「K」は個人理想の自由を追求し、旧制度への反発を試みた。しかし、それは周りにいた多くの知識人ではない人間との軋轢を生じさせた。そればかりでなく、「先生」と「K」といった知識人同士の間、そして本人の心の中ですら「因襲と自由」が矛盾を起こし彼らを苦しめた。このように、明治時代の知識人の多くが、因襲に囚われながらも個人の自由を追い求めるという二重の精神構造を持ち合わせていたと読み取れる。このような乖離的な思想や言動は、結果として自己閉鎖、自己崩壊をもたらした。彼らは知識人として自身の異質な思想が家庭、そして社会に与える影響を感じているが、それを解決する方法が見つからず、探求の中で迷い苦しみ、精神苦境に陥ったのだ。

(2)　過剰な個人主義

ここでは、上にも述べた自由への信奉との関連で、明治の知識人に見られる過剰とも思われる個人主義が、どのように精神苦境をもたらしたのかを分析する。「先生」と「K」は、二人とも普通ではない個人主義的な観念を持っている人物として描かれている。当時、日本社会は重大な転換期に直面し、新たに権力を持った明治政府は、先進的な西洋の国々にいち早く対抗するため、西洋の知識や技術を模倣し、そこに追いつくための国づくりを始めた。この過程で当然のように東西文化の衝突が起こり、それは日本社会全体に深刻な矛盾をもたらした。特に、知識人と呼ばれる階層の人々は、異文化に直面して迷いながらもそれをすぐにでも受け入れざるを得ず、そこには必然的に恐れ、疑い、不安などの精神不安が表れた。『こころ』に描かれた「先生」と「K」は、幼年期に同じように日本の伝統的な儒教や武士道などを元にした倫理道徳教育を受けた後、西洋の自由、独立、自己を尊重す

る個人主義的精神などを受け入れる、もしくは受け入れざるを得なくなった。重松（1991:67）は「先生」と「K」という二人の関係について、「彼らが明らかに同じ精神圏に住んでいたことを物語っている」と指摘している。すなわち、この二人はあたかも明治の知識人を代表するかのように精神状態が近く、それは過剰な個人主義として作品の中に表れている。

個人主義について、夏目漱石は『私の個人主義』で以下のように説明している。

> 個人の自由は先刻お話した個性の発展上極めて必要なものであって、その個性の発展がまたあなた方の幸福に非常な関係を及ぼすのだから、どうしても他に影響のない限り、僕は左を向く、君は右を向いても差支ないくらいの自由は、自分でも把持し、他人にも附与しなくてはなるまいかと考えられます。それが取りも直さず私のいう個人主義なのです（夏目，1978:149-150）。

漱石が言う個人主義は、一見、人を損ねる個人主義ではなく、自分と他人を同じように尊重する近代西洋的な価値観、倫理観であるように見える。このような個人主義を実現するには、平等を原則とする場合が多く、この平等の原則に背けば、それはただの利己主義になってしまう。しかし、漱石が言う個人主義や自己本位は、他人の自由を最大限に認める代わりに、自身の自由、目的、個性、本位も徹するというシンプルな考えである。そのためこの個人主義では、自身の思想や行為が他人にどのような影響を与えるか、それらが自分と他人の間に正当な「平等の原則」をもたらすことができるのか、ということまでは考慮されない。この点に関しては漱石も気づいていたのか、この『こころ』という小説が自己本位とエゴイズムの葛藤をテーマに描かれている点が興味深い。

「先生」は「忠孝」と「自由」の間で葛藤し、最終的に自分の心に従う「個人主義」を選択した。その結果、叔父に裏切られ、土地や家財なども奪われ、故郷を離れて漂うように東京に住むことになる。つまり、「先生」は行為の主体として完全に個人の意志で行動し、伝統的な習わしだけでなく自身の周りの人々をも無視する存在である。親友の「K」と時を同じくしてお嬢さんを好きになった時にも、「先生」は自己本位をもって計略で「K」を徹底的に打ち負かした。そのような「先生」だからこそ、「K」が自殺した際に彼が最初に気になったのは、「K」の遺書に自分の利己的な行為が言及されていないかどうかだった。西洋的自由の価値観に基づけば、「先生」が恋愛の自由を追求するのは間違っていない。だが、周りを顧みない過剰な個人主義で道徳を無視し卑劣な手段を使って勝利したことで、「先生」の心は次第に蝕まれていく。

これは「K」においても同様で、彼もある意味過剰な個人主義者だと言わざるを得ない。「K」はもともと周りなど顧みずに、養家や実家に相談することもなく資金だけ提供してもらい、東京で自分勝手に好きなことを勉強し、自身の精神の向上こそ人生での最重要課題なのだとして身勝手に生きていた。彼がお嬢さんに恋をしていると感じた時も、「K」は自身が精神的な求道者であらねばならぬと言う信念を曲げることができず、恋が自分の求道と衝突し身勝手に精神苦境に陥る。さらには友人の「先生」にその苦境を表明し、「先生」に先んじようとしたのか、あるいはお嬢さんに対して突き進んでいく決心なのか、その意図は不明だがともかく自身の精神苦境から逃れ楽になろうと考えた。この過程で「先生」にしても「K」にしても同じことなのだが、お嬢さんの心や気持ちを尊重する描写はほぼ出てこない。最終的には、「先生」にお嬢さんをめぐる争いで先を越されたことを知り、「K」は自殺を選ぶ。ある意味「自殺」と言うのは個人主義の最たるもので、「K」にせよ「先生」にせよ自殺でこの世と決別しているところは、漱石の言う個人主義、自己本位を考察する上で興味深い。いずれにしても、このような描写の中で、「K」は登場からその死に至るまで、彼はどのような家族や社会、友人などの束縛や絆があっても、自分の世界だけで生きていく完全な個人主義者として描かれている。

(3)　過剰な個人主義

夏目漱石と『こころ』に登場する知識人の間には一定の関連性があり、『こころ』に描かれた知識人の精神苦境は漱石の個人的な経験と関連している。漱石と「K」は、養子に出され復籍する経緯や、学業における経歴と優秀さ、自身の志を家族に反対されたこと、家制度を託された人生など、多くの面に表れている。「先生」との類似点

は、厭世的な性格や自己本位とエゴイズムの葛藤などの精神面に表れている。

東京の名主の家柄に生まれた漱石は、五男だったこともあり両親にはあまり期待されなかったらしい。生後すぐに里子に出され、一旦実家に戻るが、その後すぐに塩原家の養子となる。塩原家では表面的には溺愛を受けていたようだが、養父母が離婚し養母と共に生家へ戻ることとなる。しかし、実父と養父が対立してしまい、漱石が夏目家へ復籍できたのは彼が 21 歳の時だった。このように、漱石は「もの」のように「置き換え」られ、それは漱石の心に大きな悲しみと傷を残した。

夏目漱石も「K」も、両親から本来あるべき親の愛を得ることができなかった。二人ともそれぞれの里親の家で程度の良い待遇を受けたが、里親が施した「愛」は愛というよりむしろ「投資」であった。このような里親は、養子が将来必ず出世すると思い彼をかわいがるのだ。「K」の養父が「K」にお金を出して東京へ医学の勉強をさせたのも、自分の事業を引き継がせるためだった。漱石も漢学私塾の二松学舎で漢学・文学を志したが、長兄の大助に咎められ二松学舎を中退し英語を学ぶようになる。このような複雑な家庭環境、養父母の離婚、中学時代の実母の死、勉学における自己本位の喪失は、漱石に人間を深く疑わせるようになり、それがまたコンプレックスとなり彼の心に精神苦境をもたらした。

夏目漱石は明治維新の前年、1867 年に生まれた。そのため、幼年期から青年期にかけて、日本の近代化、産業革命、文明開化を目の当たりにしたはずである。また、それに反するように、人々が次第に自分を見失い、日本的な道徳心や倫理観が失われていく終始を目撃したと言われている。文芸評論家の谷秀によると、人はその生まれた時代の烙印を押されることに疑いの余地がない（1983:56）。漱石が生きた明治の時代、日本社会はまさに激動の転換期で、古い秩序は打ち破られ、しかし新しい秩序はまだ成立していない混沌の時代だった。東西文化の融合から来る混沌は、漱石自身の心の中でも激しく葛藤を起こした。当時、多くの知識人も漱石同様に迷い、戸惑い、苦しみ、答えを見つけられずに空虚な精神苦境を経験したと思われる。日本の国文学者吉田精一が言うように、日本の近代文学が近代思想を確立していくその過程での最大の課題の一つは、東西文化がどのように調和できるのか、或いはどのように融合されてゆくのかであったのだ（夏目,1979:15 に引用）。

上にも述べたように、夏目漱石は幼い頃から漢学や文学が好きで、14 歳から中国の古典を学び、少年の頃は漢文を頼りに出世することを志していた。しかし、それを長兄に反対されてからは、英語を学ぶことになり、東京帝国大学でも英文科の学生として優秀な成績を残し、その後二年間イギリスに留学することになる。ここで既に漱石の中で東西文化は衝突しているが、さらにイギリスで漱石は個人主義、自己本位などの思想を学び崇拝するようになる。このような東西の思想文化が交錯する中で、道義の上に構築され、他人に危害を及ぼさず尊重し、それでも一個人としての主体的な立場と価値を保つ個人主義、自己本位を漱石は求めてゆく。しかし、当時の混乱にあった日本社会で、自己本位を堅持しつつ古来からの慣習や道義をも尊重しようとすると、どうしても軋轢が生まれる。それは『こころ』に登場する「先生」と「K」の精神苦境からも明らかで、漱石自身も同じように精神のジレンマと同居していたからこそ、「先生」と「K」という自身の分身をもってそれを表現したのだろう。

5.　おわりに

『こころ』も含めて、夏目漱石の多くの文学作品には明治の知識人が登場し、それは終始一貫して漱石の創作意欲を掻き立てるものとなっている。中国の作家殷海光が、「知識人は時代の目だ」と言っているように（2002:543）、「先生」や「K」のような明治の知識人は、一般人よりも社会の精神構造やその発展に敏感で、だからこそ変革の時代に戸惑い、自身の中にある日本的倫理や道徳と西洋的価値観とバランスを求めたのだろう。漱石が主張する西洋的価値観に基づいた個人主義や自己本位は、他者の本位をも最大限に尊重しようとするものだが、結果的に自己本位を守り切ろうとすれば他者の利益や感情を無視せざるを得ず、それは「先生」と「K」の思考、行動からも明らかである。つまり、漱石の考える個人主義、そして自己本位は破綻すべくして破綻したのだ。漱石はこの明治における近代化に隠された大いなる矛盾を感じ取っていたのかもしれない。だからこそ、「先生」

と「K」はその矛盾を解決することができず、自己本位を追求する形で自死する。グローバル化の時代を生きる私たちも、異質な価値観の侵入に直面し、解決できない矛盾を抱えることも多い。しかし、「先生」や「K」のように自己本位を追求し自滅しても、それは問題の根本的解決にはならない。私たちは伝統的な道徳や倫理、価値観を他者と戦わせるのではなく、相互的に合理的で共鳴できる秩序を探し求め続けるべきで、そこにこそ自己形成、そして精神的な向上があるのだろう。

本稿は、『こころ』に登場する知識人の精神苦境を中心に、彼らの孤独、疑い、矛盾、隠匿などから生じる精神苦境を考察した。これらの人物の思想は、明治における日本社会の変革、混乱と密接に関連している。特に明治期の「文明開化」における「自由」を代表とする価値観は、日本の「家制度」つまり家という存在への献身、忠誠と離反し、知識人の精神に乖離をもたらした。その結果として、「先生」や「K」は利己的な個人主義を追求し、ついには破滅の道を選んでしまう。このような本稿の考察は、明治の知識人の精神苦境を理解していく上で重要である。しかし、当然この考察は明治の知識人の限られた一面を捉えたもので、多文化主義や異文化コミュニケーション、多文化共生などからのアプローチには欠けている。例えば、東西文化、日本と西洋のように二元的に分けるのではなく、より多元的に家制度や当時の恋愛観を別個に検証することも可能であろう。また、漱石の考える個人主義や自由だけでなく、より幅広い明治の知識人が直面した西洋文化を考察に入れることもできる。例えば、福沢諭吉の『学問のすすめ』にある「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らずと云えり」という言葉は、西洋の自然権の思想を儒教の「天」の観念を用いて解釈し表現したもので、本稿の議論する明治の知識人の思想や言動とは一線を画する。このような方面からの研究は、『こころ』に見られる明治の知識人を精神苦境という一面だけの考察から解放し、新たな知見をもたらす可能性がある。今後は、このような多元的、多文化的、そして多解釈的な研究が期待される。

【引用・参考文献】

殷海光(2002)『中国文化的展望』上海三联書店、p.543
于婧(2009)「論小説『心』中知識分子的悲劇場生存方式」『中国優秀修士学位論文全文データベース』(上海外国語大学)、p.2
押野武志(1998)『『こころ』静は果たして知っていたのか.漱石が分かる』岩波書店
越智治雄(1971)『漱石私論』角川書店、pp.115-117
叶琳(2003)「对明治末期知識分子心灵的探索—试析夏目漱石的小説『心』」『外語研究』p.4、pp.46-50
侯冬梅,夏目漱石(2017)「『心』的文学論理学研究」『西部学刊』(3)、pp.53-58
佐々木英昭(1994)『『新しい女』の到来—平塚らいてうと漱石』名古屋大学出版社
重松泰雄(1991)「K の意味—その変貌をめぐって」『漱石作品論集成 第十巻 心』桜楓社、p.67
姜宇霊(2008)「浅析日本家制度特征的形成要因」『成都理工大学学報(社会科学版)』(2)、pp.97-100
徐崇温(1988)『存在主義哲学』中国社会科学院出版、p.276
谷秀昭夏(1983)『夏目漱石論』河出書房新社
陳加興(2019)「倫理学視视域下的夏目漱石『心』中人物悲劇探析」『中国優秀修士学位論文全文データベース』(武漢理工大学)、pp.42-43
趙小娜(2019)「論夏目漱石後期三部曲中人物的倫理困境」『中国優秀修士学位論文全文データベース』(西北大学)、pp.22-25
夏目漱石(1951)『こころ』角川書店
夏目漱石(1979)『夏目漱石全集·別巻』筑摩書房
福沢諭吉（1978)『学問のすすめ』岩波文庫
李素(2010)「浅析夏目漱石『心』中“K”的形象」『東岳論叢』31(12)、pp.76-78
ルネ・デカルト（1961)、山田弘明訳（2006)『省察』ちくま学芸文庫